

ラ
ラ
バ
イ
[1]

千
葉
和
魂

空っぽの体の中に日々蓄積されていく黒いカス。それが彼の体を満たすと手の震えが止まらなくなった。他に不調はなく、手だけが常に細かに震えていた。おかげで誰にも気付かれない。それは幸運なのか不運なのか。いつか収まると期待をしていたのだが思うようにはならない。二十八才になったばかりの彼は、三十代、四十代、五十代と死ぬまでこれが続くかもしれないという諦めと怖れに蝕まれ始めていた。

そんなとき曇った空の隙間から春の日差しを見つけると、彼は無性に駆け出したくなった。そわそわとする気持ちが踵を浮き上がらせる。奥歯が落ちて着かない。喉で鳥が鳴きだすかのようになぞわつく。手の震えなんて気にならないほどに。一度はなんとか衝動を抑えた。だが、二度目訪れたとき、彼はさすがの気持ちで衝動に身を任せた。

走りだした。直ぐに息苦しさで頭痛がして手足が重い。速度も歩くときと変わらない。視界がどんどんと狭まっていく。そのことにさえ気付けない。もう走れない動けない立ち止まろうと思うが、彼はゆつくりと一步一步と足を動かす。痛む頭の先から汗がひとすじ流れる。と同時に黒いカスが滲み出た。そしてふっと蒸発すると風にかき消された。彼はその瞬間が見えた。虚ろな状態だったがしっかりと目に映った。

それから、週末の昼過ぎに自宅から歩いて一〇分ほどのところにある道を

走ることが習慣になった。そこは海岸の護岸ブロックとともに散歩やジョギングができるようにアスファルト整備されている。彼のスタート地点となるモーターから道が途切れる河口まで往復でおよそ五キロになる。彼と同じように走っている人や何が狙いかわからないが釣りをする人、大小様々な犬を散歩させる人もいる。リードをつけていない犬が急に近づいたため蹴飛ばしそうになったこともあった。

週末毎に日差しが少し強くなっていることを感じる。季節の移り変わりなんてものに気を寄せることも走り始めてからだ。往復を一度も休まず走り切る体力もついた。黒いカスが体から湧くこともなくなった。汗ばむ体が心地よい。それでも風が強く吹くとまだ肌寒い。

この日のように雨が降った後は散歩する人たちは少ないが、近くにある高校の学生たちが海岸にやってくる。恋人もしくはそれ未満であろう男女数組がほぼ等間隔の間を開けて護岸ブロックに腰掛けている。雨や寒さなんて青い恋には関係はない。濡れる海岸すら恋の彩りになるのだろう。初めのうちは微妙な距離に離れて二人で押し黙ってただただ波を眺めていたのが、徐々に距離が近づき、ふれあい、寄り添い、重なり合うようになる。彼はそんな恋模様を横目に走るのも悪くないと思えるようになっていた。

水たまりを跳ねて避けながら走る彼の視界に、辺りを見渡す制服姿の女の

子が入った。彼女の傍には座ってぼんやりと海を眺める制服姿の男子が座っていた。二人の横をスピード上げて走り抜けようとしたが、女の子が片手を振って走路を遮り、「すいません、すいません、すいません」

と早口言葉のように繰り返す。と言われても急には立ち止まれない。彼女とぶつかりそうになるのをなんとか避けた。息を切らしながら、「急に危ないだろうが」と言いかける彼に女の子はカメラを差し出して、

「これで写真撮ってよ」

と笑みを浮かべながら言った。まったく悪びれる様子もない。昔からの知り合いにでも頼むようだった。

確かに人通りもまばらだけど、何も走っている俺に頼まなくても、と思う彼の口から溜息と荒い呼吸が吐きだされた。

彼は仕方なく女の子が両手で差し出すカメラを受け取った。それは使い捨てカメラだった。緑の紙で包まれたアレだ。こんなもの今どこで手に入られるのか、と思いつながら彼はフィルムを巻くネジを回す。音と感触が懐かしい。残り撮影枚数を示す数字は十二。呼吸も落ち着いてきた。彼が小さく四角い穴から二人を覗くと、女の子に促されてこつちを向いた男子は少し笑った。それが嬉しかったのか女の子も満面の笑みでピースサインを作ったので、シャッターボタンを押した。カチリと軽いプラスチック音がした。

「ありがとうございます」

お礼は出来る子だったようだ。でも、すぐに二人は海の方を向いて、彼の存在などなかったかのように二人の世界に戻った。

ズズと影を引きずる音が彼の耳の後ろでした。彼も二人のことを忘れるように走りだした。潮気が強い海風に体が冷やされ硬くなる。両腕を振り回し大きく息を吐いて体をほぐそうとしたとき、その感覚が二年前のことを思い浮かびあがらせた。彼はすぐに振り払おうとギアを上げるように強く駆けだした。

夏の終わり。その気配を感じながら走る海岸。今朝まで二日続いた雨のせいで蒸し暑さが残っている。水平線から連なる灰色の雲。少しずつ少しずつ波とともにこちらに押し寄せる。また降り出しそうだったが、彼は走る必要がある。雨が止んでいる瞬間を見逃せない。だが折り返し地点まで来ると弱い突風が吹き、それが合図だったかのように雨がぼつりぼつり降り出した。散歩するまばらな人たちも引き上げていく。

雨足も強くなっていく。彼はここまで来てしまっただけでもこの中を走って帰るしかない。頭から靴まで濡らし、服が体にまとわりつく。しばらくすると案外雨の中を走るのもいいものだと思うようになった。誰もいない海岸を雨に打たれながら走るなんて映画のワンシーンみたいだ。彼の頭の中で

は腹の底から熱い力を鼓舞するドラム音が響く。それに合わせて、フウツ、フウツ、と息を吐き、一点先をだけを見つめて走る。

その端で海岸に座る人影を捉えた。膝を抱えて座る女のようにだった。彼の足音、息音に気付いたのか顔をあげてこちらを見た。あの女の子だった。

濡れた制服が震えているように見えた。自然と速度を落とし、彼はゆつくりと立ち止まった。彼女は表情を変えず、ぼんやりとした視線を向けたまま逸らさない。息を整えた彼は何も言葉が出てこない。発する言葉が頭を巡っても、波音に掻き消された。

女の子は立ちあがると、

「これで、写真、撮って」

と擦れ声で言いカメラを差し出した。

(続)

PONARTY

ララバイ [1] 千葉和魂

住 所／苫小牧市字樽前 114

ホームページ／tarumae.com

発 行 日／平成 27年 2月

発 行 所／NPO 法人樽前arty プラス

発行責任者／藤沢 レオ

装 丁／堀米 和克

本誌に掲載されたすべての記事・画像の転載を禁じます。